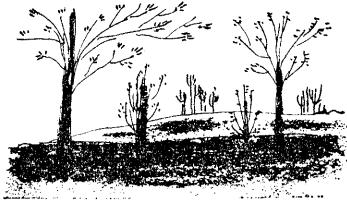


椿と私

——津山尚先生にきく——



編集会議で、「春の花によせて」ということで津山尚先生（お茶の水女子大学・植物学）に何か春らしいものを書いていただこうということになり、ある日研究室へお願いにあがりました。訪問の主旨を聞き終えられた先生は、「僕は専門の仕事以外の原稿は書かないことにしているのですけれども、お話ならいたしましょう。録音して原稿になさるのならかまいません。しかしその題では気が進みませんね。春だからといって概念的に、それ花だというのには抵抗を感じます。花も生きものです。植物は生きものです。生まれて、育つて、死んでいく、その一生を通じてみなければ本当のことがわからないのは、人間をふくんだ生物もみな同じでしょう。はなやかな時だけに目を向けるのではなくて、その一生の終りまでずっと見るのが本当でしょう。春だ、それ花だという発想では、イメージがわきませんね」と、言われました。

考えてみれば全くそのとおりであり、その言葉の中に、津山先生の植物に対するいつくしみの気持ちを感じたことでした。そして、御退官間近い先生に、長い研究生活で感じられた植物への思いの一端でも、ぜひうかがわせていただきたいという気持ちがつりまわりました。先生も、そんなことをおっしゃりながらも、「それでは、『椿と私』なんていうことでよければ」と、興味ある話をきかせてくださいましたので、御紹介いたします。

津山尚先生は、椿の研究では世界的に有名でいらっしやいます。

（編集部）

椿との出会い

何でも研究のきっかけというものがありません。それは、意図されたものもあるし、偶然ということもあります。椿と私に関しては、全くの偶然なのです。それは、こういうことです。

私は広島で当時の高等師範の付属小学校を出しましたが、そこで六年間お世話になった担任の相沢先生は、すばらしい先生で、高等学校、大学、大学院の時も、ずっと親しくお教えいただきました。幅の広い先生で、皆からとてもなつかしまれていました。それで、新潟の御郷里に隠退されてからも、時々みんなどで、あるいは個人で先生を訪れました。六〇〇メートル位の本当の山奥の水梨という所です。冬は数メートルの豪雪地です。

終戦後まもなくのある年の四月だったと思います。軽便鉄道に乗り、さらにバスに乗りついで先生のお宅へ向う途中でした。雪国の春ですから、まだ雪の堆積がバスの両側の所々に見られるし、森の床面にも雪がとけ残っているわけです。バスにゆられながらいくと、林の中に赤い花が咲いているのがチラリと見えたのです。直感的に椿だと思っ

たのですが、私のイメージでは、また当時の多くの植物学者のイメージでは、椿というのは南の暖国のものだとされていたのです。椿といえば大島の油売りの乙女とか、八丈島や室戸岬の椿とかが思い出されて、こんなに雪の深い所にあるのが非常に不思議だと思ったのです。

その時ハッと気がついたことは、その前の年でしたか、当時の東大の教授であった本田正次先生が、岩手県の猿岩——猿しか登れないような岩山という意味でしょうか——で新しい椿を発見して、当時まだ学会誌が回復していなかったので、小さな雑誌に発表されたわけです。称してサルイワツバキと命名されたのですが、そのことを思い出し、あるいはと思ったのです。

バスはどんどん進みます。しばらくすると、また赤い花が窓辺を過ぎ去って行きました。もうためらいは許されません。運転手さんに手短かに事情を話して「止めてください」と叫ぶように頼みました。「じゃあ、お客さんの同意を得てください」との応答。すぐお客さんの方に向きなおって、こういうわけだから、一分間だけでも止めてくださいと頼みました。バスは止まりました。泥んこの雪道を数メートル走りもどって取って来たのは、まさにサルイワツ

バキでした。当時はまだ戦後で、実際に猿岩まで行くのは困難でしたから、文献でしか知らなかったわけですが、まさしく本田先生が見つけられたサルイワツバキと同じものでした。岩手県の猿岩にしかないといわれていたものが、新潟県にもあった、その発見はうれしかったですね。

それを私は大事に手に持って、花卉が散らないように、そつと相沢先生のお宅までいったのです。そして先生に「こんなめずらしいものを発見しました」と、得々として話しますと、「なんだ君、そんなものいくらでもあるよ。すぐにでも案内しよう」と、先生の持ち山である裏山へ行きました。大きなブナ林です。その下にはササも生えていました。大きなブナ林です。雪が部分的にとけたところから、雪におさえつけられていた枝が立ち上って、ポツポツと咲いている。「これ、君、そんなに面白いものか」と言われました。

帰途信濃川の方に下りて来まして、十日町——十日町紬で有名な織物の中心地で、雪が非常に多い所ですが——この家なみを見てみますと、町家の玄関先や庭先に、何げなく椿が植えてある。それが全部、バスで見つけた椿、相沢先生の裏山の椿、すなわち本田先生が猿岩にしかないとい

言われためずらしい椿か、またはその系統の園芸品種だったのです。

猿岩にしかないと言われた椿が、ここにはこんなに沢山ある。どうしてだろう。しかも椿は暖国のものだと思っていたのに、こんなに雪深い所にあるのはなぜだろう。

これが、私が椿に出合い、椿の研究をはじめたきっかけです。

ヤブツバキとの相違

ここでもちょっと、この椿と今までよく知られている椿——ヤブツバキと言います——との目立つ相違を説明しましょう。一番の特徴はオシベで、ヤブツバキのオシベは筒型になっていますが、サルイワツバキのオシベは下の方だけくっついて、上の方は離れて広がっています。ですから、この点は一見サザンカに似て見えます。それからサルイワツバキのオシベの細い所、花糸といいますが、それがヤブツバキの白色とは違って、まっ黄色、カドミウムイエローなのです。また、サルイワツバツの新葉の柄には絹糸状に光る毛がありますが、ヤブツバキの葉にはそれが一本もありません。

身のまわりのものには案外無関心であること

ところで話はかわりますが、「すみ焼長者」という物語を御存知ですか。柳田国男先生が発掘された話ですが、本中のあちこちに似たような話があるのです。一か所だけにそういう民話があるのなら、日本人全体の問題ではあり得ないのですが、似たような話が遠くはなれた地方の民衆に語りつがれているということに、意味があるのです。

田舎に一人の貧乏なすみ焼の男が住んでいました。毎日すみみを焼いてやっとなぎ生きている。山の草を取って食べ、たまには鳥もとるが、えものはないし、網もありはしない、石を投げて百に一つもあたればよい位でした。ある日突然ここに都から美しいおひいさまが、おしかけ女房にやってきました。そこでどんなやりとりがあったのか、その機微はわかりませんが、とにかく一緒に暮すようになったわけです。ある日おひいさまがひよいと見ると、夫が石を投げては鳥を落そうとしているのです。よく見ると、石がキラキラ光っているではありませんか。金なのです。しかしすみ焼はそれを知らない。「あなた、これは大変なものですよ」「いや、こんなものなら、この辺にいくらでも

あるよ」というありさまです。ここではじめて光る石の価値がわかり、その男はすみ焼長者と言われるほどの者になったという話です。

柳田先生はどう解釈しておられたか私は知りませんが、水梨の椿の山に入ってこの話を思い出しました。身のまわりに沢山あるものは、それこそ日常茶飯のことで、そのものの真の価値はわかりにくい。これを別の視点から見ればそこに新しい評価があり得るということでしょうか。

ユキツバキという呼称

この椿が植物学者の間で知られていなかったのはなぜかという点、こういうことだと思ふのです。

日本に生えている植物は非常によく調べられております。だからめずらしいものが発見されるとすぐにその地方の先生との連絡網を通じて、研究者の手に入るようになっていくんです。ところがこの話の場合は、土地の人は小さい時からこの椿になじんでいて、何の疑問も感じていないわけです。もし普通の椿ではないと思えば当然問題になっていたわけでしょうが、ただの椿だというのが先入主になっていたのですね。

私たちはヒマラヤに行って新しいものを見つかる、これはあたりまえですけれど、足もとにあるもの、さっきのみ焼長者じゃありませんけど、身近にある、普通のものの研究は案外ぬかっているのではありませんか。落ち着いて見ればいくらでも研究の対象はあるものだと思います。

ところで、植物学者は知らなかったけれども、さすがに林学者は知っていましたね。実際に山を歩いているんだから、これは普通の樺と違うことをちゃんと知っていて、「ユキツバキ」と呼んでいました。私は林学者の名誉のためにも、また雪深い国で咲く樺にまことにふさわしい名前であるゆえにも、この「ユキツバキ」を正式な名前として採用しました。今では全世界に、*Snow Camellia* で通っています。

ユキツバキとヤブツバキの分布

その後研究をしてだんだんわかって来たことですが、分布から見ますと南の方は全部普通のヤブツバキなのです。

九州、中国地方から中部地方——しかしあまり山の奥の方までではありません。樺には寒すぎるのです。それからずっといきまして、関東地方から太平洋岸にそって宮城県、岩

手県と北の方に行くに従って少なくなりますが、ずっと青森の北の端まである。北の方は分布が断続的になり、青森県の樺山というところ、ここには樺にまつわる悲恋物語があります。そこで終わっています。一方日本海岸側には対島、佐渡などをふくんだ中国地方からずっと富山県あたりまで、また新潟から秋田、青森県の海岸にポツポツと分布しているんです。従って、ヤブツバキは日本列島の南からハサミではさむようにして、四国、九州を元とすると、太平洋岸は太い刃で、日本海岸は細い刃ではざんざんと言えましょう。

一方ユキツバキの分布は、自分でも歩いたし、人の援助もうけて研究したわけでありすけれども、それは山手にあるのです。およそ三〇〇メートルから一、〇〇〇メートル位の日本海側に傾斜した山地、それは積雪量が多い所というわけです。猿岩というのは岩手県です。太平洋側のようにみえますけれども、そこだけはちょうど中央山脈が切れていて、その切れ目から雪が吹き込んで来る所にあたってきます。あそこだけは位置の上からは太平洋側であっても、実質的には日本海気候が支配しているのです。サライワツバキ（ユキツバキ）の最初の発見地はこのように

非常に特殊な地点だったわけだ。

ユキツバキのこと

椿は暖かい所が好きだと一般的に思われています。それは本当です。実際にユキツバキだって暖かい所が好きなのです。どういふ暖かさかと言いますと、積雪何メートルの雪の下の暖かさを求めているのです。

雪の下は暖かいのですね。山形県には雪菜といつてわざわざ雪の下で栽培する野菜があります。冬でも凍らないで軟らかく生育します。雪の下は風が吹いても寒くはない。気化熱がうばわれないためです。それに植物も生きるために呼吸をしていますから呼吸熱がでる。雪のカバーでそれが逃げないのです。それで雪の下は暖かい。

こういう所に生えているのですからユキツバキは雪の重さにたえる力があります。長いこと豪雪地方の雪の下になつてゐるわけですが、この圧力は大変なものです。そのためにも枝も葉も地面にベシヤンコに押しつけられます。それでもユキツバキは平気なのです。中にある繊維が長く、枝は非常にしなやかなのです。だから春になったらどうでしょう。雪がとけるに従つてピンとはねあがるので

す。折れたたまれていた葉も何の障害もなく、もと通りに平らにもどつてしまします。ヤブツバキの方はそういうわけにはいきません。日本海側の方に住んでいる方でも、ヤブツバキのなかなか良い品種があるから、買って植えたくなる。植えるかどうかということになるかという、沢山雪が降り積ると、その巨大な圧力で枝葉がバラバラに折れてしまします。新潟ではこの惨状を「ちようちんだたみ」と言つてゐます。だからヤブツバキには、冬に入る前に非常に敵重なスノーシュルターが必要なんです。しかしユキツバキは平気です。どんなに雪でベシヤンコになつていても、春になつて雪がとけるに従つて起き上り、可れんな花を、まだ雪のとけ残っている山や町で咲かせるのです。

私の椿の研究の全部を今ここでお話する時間がないのが残念ですが、それにしても、あのバスの中で見た椿が私を椿の研究にひきこんでいったのも、因縁というほかはありません。しかし、椿ばかりを研究しているわけじゃありません。私、津山という椿と思われてしまいがちですけれども、椿だけじゃやっていけませんよ。でも、椿が好きなことは、それはもう本当のことです。